第16回研究大会

口頭発表「生き物と共に育つ保育のあり方」

光村智香子　高野史朗

１　はじめに

幼児期において身近に動植物とかかわりをもつことの意味は大きい．幼稚園教育要領「環境」領域においても，そのことを示唆するねらいや内容が示されている．また，幼稚園で直接体験を通して生き物に親しむようになると，いたわりや思いやりの気持ちをもつようになったり，生き物に対する探究心を養ったり，生き物の立場にたって物事を考える力を育んだりすることに寄与すると考えられている．

本園では，生き物と共に生活する具体的な幼児の姿から，これらの育ちが見られるのかをこれまでの飼育活動を振り返りながら検証するとともに，よりよい生き物との生活のあり方を探ることを目的として，平成25年度から「生き物と共に育つ保育のあり方」をテーマにして研究を行っている．

本発表では，研究を行う過程で，各学年を担当する保育者が疑問に感じたり，心を揺さぶられたりしたことについて報告し，話題を提供していきたい．

２　各学年における生き物とかかわる姿

(1)　４歳児：小鳥（ブンチョウ）当番の経験より

本園の４歳児は60名が在籍し，20名ずつの３グループを編成して保育にあたっている．園内には６羽のブンチョウがいるが，例年４歳児がブンチョウの世話をする「小鳥当番」を行っており，昨年度も園生活に慣れてくる２学期頃から取り入れることにした．小鳥当番は，１日に３グループから２名ずつ，計６人で行った．子どもが家から持ってきた葉野菜をブンチョウが食べたり，自分が換えた水を飲んだりする喜びを保育者に伝える姿が見られるようになっていった．グループで集う中では，自分の当番がくることを楽しみに思えるように，また，グループでの共通の話題となるように，その日の当番の子どもに当番活動で気付いたこと，感じたことを話してもらうトキを毎日もつことにした．

本園の研究を進めていく過程で，４歳児では，幼児が生き物とかかわるキーワードとして，“触れる”ことが挙げられた．触れることを通して，興味が深まり親しみを感じたり，色々な気づきを得たり，興味の赴くままに試したりしていることがわかったからであった．しかし，小鳥当番は，手乗りのブンチョウではないので，世話をすること，あるいは“見る”ことがかかわりの主体となる．触れることが難しい小鳥当番を，なぜ今まで保育計画に取り入れてきていたのか？この当番活動は４歳児にとって適切であったのか？という疑問を教職員間でもち始め，子どもたちの姿から小鳥当番の意義を再考したいと考えた．

■ep，１　卵が産まれた！＊2013/10/22

火曜日，ブンチョウが卵を産んでいた．そのことに保育者が気づき，皆で集って小鳥当番の話をする中で，ブンチョウの卵のことを話題にした．ほしＧでは降園時，昇降口に向かう途中にあるブンチョウのケージを皆で覗き，**しろしろ**と**エプロン**（ブンチョウの名前）が住む壷巣の中に卵があることが見えるように一人ひとり抱きかかえてやると，「ほんまや」「（**しろしろ**と**エプロン**）どっちがお母さん？」と卵があることや，**しろしろ**や

エプロンに興味を示していた．

■ep，2　「明日３つになってるんちゃう？」＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/10/23

　この日は卵が２つになっていた．昨日子どもたちと卵の話をしたり見たりしたが，そのことを覚えていて自ら卵を見に行く子どもはほとんどいなかった．その日の当番であったカナコは「卵が２つあった！」と嬉しそうに保育者に報告してきた．そこで皆で集って小鳥当番の話をする中で，カナコにも話してもらいながら,卵が２つになっていたことを伝えた．すると，「明日３つになってるんちゃう？」という言葉が色々な子どもから聞かれた．話の途中にもカイト「僕見てくる！」と様子を見に行こうとする子どももいる．降園時には，昇降口へと向かう途中で，自ら様子を見るサトミ，サイカらの姿もあった．

■ep，3　「～ちゃう？」と推測する＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/10/24

　登園するとヒロキ，リュウイチ，コウガらは,自らケージを見に行く.すると，「先生！３つになってる！」と発見！そのことをまた皆で集う中の話題にする．するとその日の小鳥当番であったジュンジは「あのね，**しろしろ**ちゃんが（卵を温めていたので）お母さん．**エプロン**ちゃんは（よく壷巣から出ていくので）子どもやねん」と，ブンチョウの様子をよく見ることで気づいたこと，考えたことを話す．そしてトモキは「明日は（指で４を示し）やー！」と卵の数が明日も増えているのではないかと期待をもっている．

■ep，4　卵が落ちて，割れて…＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/10/25

　朝保育者が確認すると，卵は２つが壷巣から落とされ，壷巣には１つしか残っていない．子どもがどう気づくだろう…と思い，あえて保育者からは話題を持ち出さないことにした．すると，ほとんどの子どもは，子どもの目線に壷巣がないことから，中が見えず，そのことに気づかない．ケージの下の方に落ちている卵にも,小さいからかほとんど気づかない．小鳥当番をする段になり，ケージのトレイを掃除している時に，当番のユウコが「これ卵？」と気づく．保育者「ほんまやね，なんでやろ？」と問うと，同じく当番のジュン「赤ちゃん生まれたんちがう？」と言う．保育者「そうか…でも，赤ちゃんの姿が見えないね」と言うと，ジュン「……」割れている卵からは黄身が出ている．ユウコ「これ，黄身？」保育者「ほんとだね」と話しながら世話を続けるが，卵についてそれ以上は話題にならない．卵があった壷巣やブンチョウの様子をよく見ているユウコ，ジュン．そこで，皆にも知らせたいと思い，卵の殻を保育者が拾い，カップに入れる．それを見ていたユウタが,「赤ちゃん生まれたん？」と話す．保育者「わからないけど，赤ちゃんの姿が見えへんねん」と答えると，一緒にいたコウガが「（**しろしろ**と**エプロン**が壷巣の）外に出る時に落ちたんちゃう？」と言う．保育者「そうか…それなら悲しいね」と言うが，二人もそれ以上は何も言わずにブンチョウの様子を見ている．皆で集う中でこのことを話題にしようと思ったが，この日は台風の影響で警報が発令され，途中休園になってしまい，話はできなかった．

■ep，5　卵と巣（“おたより”より）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/11/15

　先々週に，ブンチョウたちの卵が産まれ，１つから翌日には２つに，さらに翌日には３つに，と卵の数が増えることから，卵に興味を持ち始めていた子どもたち．しかし,その卵をブンチョウ（特に，体が白い**しろしろ**ちゃんと**えぷろん**ちゃん）がどうやら落としてしまい，なかなか温めてくれないことにも気が付きました．どうして…？よく見ると，壷巣が少しぐらぐらと不安定なこと，また人間の目が多くあったり，大きな声を出したりすることから，ブンチョウはドキドキして，卵を温めなくなるということを伝えました．そこで，壷巣よりも安定性があり，人間の目が届きにくい巣箱にお家を替えることを提案しました．先週，その巣箱を取り付けてみましたが，新たな環

境に慣れないのか，なかなか巣箱には入らないブンチョウたち．なんでだろうね？と投げかけてみると，「入口が小さくて，小鳥が大きいから」と，巣箱の入口の大きさに対して，ブンチョウの体が大きいからではないかという意見が．すると，「じゃあ屋根とったらいいやん」と，一度巣箱を取り付ける前に，屋根をとって巣箱の中を見せたことを覚えていた別の子どもから，そんな意見も出ました．さらに，「でも，そしたら見えるやろ，そしたらお母さん（ブンチョウ）がまたドキドキするやろ，そしたら卵……」と，人間の目が届きやすくなってしまい，卵をまた温めなくなくなるのでは…という心配の声も出てきました．なるほど…では，一度屋根を取ってみて，ブンチョウたちが入るようになったら，また屋根をすぐ取り付けることにしたらどうか？と保育者から提案すると，そのように相談は落ち着きました．そして早速屋根を外してみました．すると，翌日には広い屋根の部分からではなく，巣箱の入り口から顔を覗かせるブンチョウの姿が！「入ってる！」と喜ぶ子どもたち．すぐに屋根もまたつけました．ようやくブンチョウたちも巣箱の環境に慣れてくれたようです．これで一安心！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これらの姿を通して感じたことは，卵が生まれたり落ちたりするなど，予期せぬ出来事が起こる中で子どもたちの興味・関心が高まっていったということである．また，卵の数が日々増えることへの期待も高まった．そのような出来事に出会うことから，保育室から少し離れた場所に置いてあるケージに自ら見に行く子どもの姿もあった．この予期せぬ出来事は，命ある生き物であるからこそ起こることであろう．

また，当番活動を行うことは，皆が共通の経験をもつことでもある．集団の場での話でも，自分も経験していることであるからイメージしやすく，友だちの話にも耳を傾け，いろいろな気づきや考え方に触れたり，それを受けて自分なりに考えたり興味が広がったりする機会になった．

また，壷巣から巣箱に替える時に子どもたちに相談した際，巣箱にすると安定するが，中が見えにくくなるけどいいかな？と子どもたちに聞いたところ，「見えなくなるの嫌や」と答えた子どもと，「でも，そしたら見えるやろ，そしたらお母さんがまたドキドキするやろ，……」というように，ブンチョウの立場に立って考えているような発話をした子どもはほぼ同程度であった．ブンチョウへの自分なりの思いを強くもったり，ブンチョウのことを大切に思ったりする気持ちが見てとれた．

しかし，ブンチョウに親しみを感じ，思いをもってかかわってほしい，卵をかえして雛の誕生を子どもたちと共に喜び合いたいと保育者は願ったものの，ブンチョウに興味が高まっている今，ブンチョウの様子が見えなくなることで興味が薄れてしまうのではないかということも悩んだ．４歳児ではこの他に，カメやザリガニ，ウサギなどを保育室で飼育していたが，それらの飼育動物はいつでも好きな時に触れられる環境であったこともあり，興味のある子どもは継続してかかわる姿が見られた．一方でブンチョウは意識的にケージの場所まで行かないと見にいけず，また触れることができないので，当番日でない時にも継続して様子を見に行く子どもは少なかった．だからこそ当番活動を行う意味があるともいえるのではないだろうか．

今年度の４歳児では，ブンチョウが６羽とも亡くなったこともあり，教職員で相談しつつ，“触れる”ことを重視して，小鳥当番ではなくウサギの世話を当番活動として行うことにした.10月現在では，少しずつウサギとかかわる子どもの顔ぶれに広がりが見られるようになっている．今後もどのような姿が見られるのか見て行きたい.

(2) ５歳児：うめと共にある生活より

本園では，子どもたちが身近でウサギに接し，より親しみをもって過ごせるよう，各保育室にケージを置いて飼育している．どのウサギと生活を共にしていくかについては，年度当初に，その学年の子どもたちとウサギ，また保育者とウサギの関係を基に，保育者間で話し合って決めている.

昨年度の５歳児は，年少・年中組の頃から雌のウサギ“**うめ**”と生活を共にしてきた．年少時は自分もウサギになったかのようにケージの中に入り込んだり，「**うめ**ちゃん，いないいないばぁー！」とあやしたりするなど，今の自分や過去の自分と重ね，自分と同じものとして接し，親しみを感じる姿が多く見られた．年中組に進級すると保育者と一緒に世話をしたり様子を見たりしながら，**うめ**にも思いがあることに気づき始めた．興味や親しみから力ずくで抱っこしたり，自分たちの遊びの場に連れて入ったりするなど，まだまだ自分本位にかかわる様子も見られるものの，自分とは異質な“**うめ**”と一緒に過ごす生活を楽しみながら，より親しみを深めていった.

そんな子どもたちが年長組に進級し，**うめ**も共に進級した．前年度の年長児が飼っていた雄のウサギ“**ちから**”も共に生活することになり，保育者は『**うめ**に出産させてやれるのでは…』という期待を胸に過ごしていた．この時私たち保育者は，５歳児のこの時期に出産を迎えることが，子どもたちが“生命”を実感したり，自分の思いや行動を調整しようとする力を身につけていったりするためにも適当なのではないかと考えていた．その後**うめ**に妊娠の兆しが見られる.

■ep，１　「こんな赤ちゃん生まれるねん」＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/04/25

すず（４歳児が飼っているウサギ）に赤ちゃんが生まれた朝,誕生を喜びつつ，**うめ**にも赤ちゃんがいるかもしれないことを保育者が伝えると，大きな拍手をしてその嬉しい気持ちを表したり，「やった！」とガッツポーズをして自分のことのように喜んだり，と子どもたちの表情が一段と明るくなった．それと同時に，**うめ**が元気な赤ちゃんを産むためには，今までのように抱っこしたり乳母車に乗せたりして一緒に遊ぶことは我慢しなければいけないことも話すと,「大丈夫！」「優しくする！」「ゆっくり“よしよし”したらいい」など，“今”の**うめ**の状況がわかり，そのかかわり方を自分たちなりに考えようともしている.

クラスでの話を終えると，子どもたちは喜んで**うめ**のケージを囲み，わくわくする気持ちで見ている．友だちと喜びを分かち合ったり，その様子を見にきていた養護教諭にもコトネ「こんな赤ちゃん生まれるねん」とウサギの絵本に出てくる赤ちゃんの写真のページを見せて伝えたりしている.

■ep，２　「明日の朝が楽しみ～」＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/04/25~05/09

うめの妊娠を知った日から，子どもたちは「いつ生まれる？」と毎日保育者に尋ねたり，**うめ**のケージの横を通る時には「まだ生まれてへんなぁ」と気にして見たり，と出産を楽しみに待っている.

一緒に様子を見ていた保育者が「私，動物当番行ってくるね.（うめに向かって）うめ，行ってきます！」と言うと，「卵産んだらおっきい声で呼ぶから！」（子どもたちの中で，ウサギは卵を産むか産まないか，考え中）と保育者が安心して行ってこられるよう声をかけてくれ，ずっとうめの側で様子をうかがっているユウ．その日は生まれなくてもユウ「今日は生まれへんかったから，明日の朝が楽しみ～」と残念な気持ちを次への期待に向けたり，ちからを見ながらサンシロウ「０歳やのにお父さんって！？…大変やなぁ」と不思議さを感じてねぎらったり，登園するとすぐにソウヤ「卵産んだ？」とワクワクして覗いたり，などそれぞれが自分なりに心を揺らしている．

■ep，３　「これやったら大丈夫や」＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/04/26

うめを抱っこすることが大好きだったコトネは毎朝「抱っこしていい？」と尋ねにくる．保育者「コトちゃん，おなかにちっちゃい赤ちゃんいるしなぁ，今は抱っこできひんねん」と答えると，コトネ「…（頷く）」とうめのケージの前に座って様子を見ている．しばらくすると再びコトネ「抱っこしてもいい？」と尋ねるので，保育者「今はまだ我慢かなぁ」と答える，コトネ「…（顎を引く）」と少し嫌そうにうめの側に戻る．しばらくするとコトネ「もう抱っこしてもいい？」と再三尋ねにくるので，保育者「コトちゃん，赤ちゃんギュッてなったら死んでしまうしなぁ，産まれるまでは抱っこは我慢しよなぁ」と伝えるとコトネ「うぅ～ん」と拗ねながらもうめの側に戻る．その様子を見ていたサキナが，うめの座っている場所に一番近いケージの隙間から指を入れると，サキナ「これやったら大丈夫や」と届くか届かないかの指先を動かしてうめの背中を撫でてやる．コトネも同じようにし，うめに指先が届くと笑顔になる．

■ep，４　「…（まだやなぁ）」「…（そうかぁ）」＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/05/13

５月10日（金）の朝，うめが藁をくわえて頭を上下に振り始めた．いよいよ出産かと場を整え，子どもたちにも静かにしなくてはいけないことを伝え，自分たちの生活の場を保育室から遊戯室に引越し，うめのケージも２クラスの間にある絵本室へと移した．保育室に入る時には“抜き足差し足”で歩いたり，大きな音をさせた時にはその場にいたみんながハッ！と顔を見合わせたり，うっかりして普段の声の大きさで話をした時には「シーッ！うめちゃん！」と声を掛け合ったりして，互いに気を配って過ごしていた．

そんな中，うめの様子を探ろうとするハルカとジン．二人でうめの出産部屋である絵本室のアコーディオンカーテンにぴったり耳をつけて絵本室の中の様子をうかがったり，床に寝転んで隙間からじっと見つめたりしながら，二人で顔を見合わせ「…（まだやなぁ）」「…（そうかぁ）」と目と目で話をしている．

■ep，５　「これ飲んだら元気になるしな…」＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊2013/05/16

出産予定日を過ぎても赤ちゃんが生まれなかったうめ．保育者も気が気でない．かかりつけの動物病院もなかったため，園内の飼育動物について指導をいただいている遠方の獣医師の先生にうめの様子を伝え相談すると，すぐに近くの病院で見てもらうようにとのこと，急いで病院へ連れて行った．受診の結果，ばい菌による子宮の炎症であることがわかり，手術も考えながら，投薬治療を続けることとなった．

子どもたちにおなかの病気になったことや手術を受けなくてはならないかもしれないこと，朝晩に投薬が必要なことを伝え，しばらくケージから出られないことや抱っこもできないことを伝える．静かに話を聞いている子どもたち，残念そうにしている．保育者は辛い気持ちでいっぱいになる．

子どもたちにも投薬の様子を見ることができるようにすると，自分が病気になった時の姿と目の前のうめを重ね，薬を嫌がるうめを「これ飲んだら元気になるしな…」と励ましたり，「うめちゃんの

好きなレモンの匂いの葉っぱに薬を混ぜて食べさせてあげたらいいねん」と自分がお母さんにしてもらったことを思い出したり，手術を思い浮かべ「痛いなぁ」といたわったりしている．

■ep，６　「レモンの葉っぱ，食べさせていい？」＊＊＊＊＊＊＊＊2013/10/28

投薬を続けることで回復にも向かい，自由に散歩できるようにはなった**うめ**．大人も子どもも共に，おなかを触らないよう，またしんどい思いをさせないよう，気を配りながら生活していた．

そんな中で，ウサギの秘密基地（子どもたちがウサギと一緒に遊ぶために作ったダンボールの家やトンネル）で遊んでいる**うめ**がダンボールを食べていることに気づいたサエ「**うめ**ちゃんがダンボールバリバリ食べたはる，食べていいの？」と保育者に尋ねる．保育者「だめよ」サエ「レモンの葉っぱ食べさせていい？」保育者「いいよ」サエ「行ってきまーす！」とレモンバームの葉を摘みに行く．＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

子どもたちは**うめ**との生活を通して，喜びや期待，我慢，悲しみ，残念，励まし，いたわりなど，予期せぬ出来事に出会い，心を揺らすことで，様々な感情を味わっていった．また，抱っこや連れて遊ぶことを控えようとするなど赤ちゃん誕生への期待から自分の行動を**うめ**に合わせようとする姿も見られる．

子どもたちの喜びや期待は，思わぬ悲しみや残念に思う気持ちへと変わってしまったが，さらに**うめ**の病気が治ってほしいとの願いに変わっていく．そして，病気を治すためにどうにか薬を飲んでほしいという気持ちから，**うめ**の薬を嫌がる気持ちを察して励ましたり，どうすれば安心して薬を飲んでくれるかを考えたりするなど，物言わぬ**うめ**の気持ちを考え思いやる様子が見られるようになった．また，病気になる以前は大好きでよく食べていたレモンバームの葉も，おなかの調子を考え，食べさせてよいものかどうかを尋ねてから摘みに出かけるなど，**うめ**の立場に立って考え行動する姿も見られるようにもなった．

自分の気持ちを抑えなければならないことと出会い，自分とは違うものの気持ちや生態に気づいたり，他者視点に立って考えることの大切さに触れたりしていったが，その根底には，今まで共に過ごしてきた**うめ**への親しみや大切に思う気持ちが感じられる．

子どもたちは様々な**うめ**の姿に出会い，ありのままの姿を見つめ，受け入れ，**うめ**のことをわかろうとしながら生活してきた．そこには，継続して飼育してきたからこその愛情や思いやる心，相手のためにできることをしようとする気持ち，相手に寄り添う姿勢などの心情や意欲，態度が育まれている様子が見られ，生き物と共に毎日を過ごすことが子どもたちの生活をより豊かにしていることがわかった．そして，保育者自身が子どもと共に心を揺らし続ける存在であるということが，“生き物と共にある生活”を活かす上で大きな環境となることも見えてきた．

また今回，**うめ**や子どもたちにとっての幸せを考えてのことが，逆に辛い思いをさせてしまったことを私たち保育者は悔んだ．生き物との直接体験を通して，様々な感情を経験してほしいと願ってはいたが，そうするにはそれぞれの生き物の生態について保育者自身が正しい知識を持っておかなければならないことを痛感し，それと共に，野生の動物ではない飼育動物としてのかかわり，“教材とし

ての命”についても悩み始めた．子どもたちが生き物との直接体験を通して学んでいく中には，生き物にとって嫌なことや辛いことも多くある．私たち保育者も“本当の生き物の姿”に触れさせてやりたいと願いながらも，生き物たちが“本当の生き物の姿”を見せることができない環境を作ってしまっているようにも感じる．**うめ**の病気をきっかけに，相談できる獣医師の先生とも出会うことができ，大きな拠り所となり支えていただいた．今後は飼育についての専門的なアドバイスもいただきながら，それぞれの専門性を活かしつつ，生き物たちの命を大切に守っていくために，どう教育現場で考えていくのか，学校園でのよりよい飼育のあり方についても考えていきたい．

３　終わりに

平成25年度に行った「生き物と共に育つ保育のあり方」をテーマに研究を進める過程で，子どもも保育者も共に様々な感情体験を味わったり，生き物と共にある生活のあり方について考えたりしてきた．自明のことではあるが，保育の中に飼育活動を取り入れるにあたり，目の前の子どもたちの何を育てていきたいのか，ねらいをどのようにもつのかによって，飼育活動のあり方も変わってくるだろう．また，飼育活動を通して得た様々な経験が，幼児の心情・意欲・態度の育ちにどのようにつながっているのか，その実態を本研究や実践を振り返りながら改めて捉え直し，今後もよりよい生き物共に過ごす生活を模索していきたい

（京都教育大学附属幼稚園）